

越河六郎さんを偲んで

藤井 亀 (芝浦工業大学名誉教授)

労働科学研究へ

越河六郎さんは、東北大学在学中に肺結核を患い、療養所での長期療養を余儀なくされました。ひたすら静かに過ごすしかない退屈な療養中の話をよくされていました。他の患者さんから碁盤の前に「とにかく石を置いて行け」と囲碁のてほどきを受け、その後の趣味の一つになった話など、辛い中での楽しかった話をよくされていました。そして、この頃の体験が、越河さんの病気や病人への接し方、やさしさ、思いやりの原点になったのではないかと思います。そして、労働科学は「人間の労働を研究する実践科学である。それゆえに当然それは人間中心主義（人道主義）に立たなければならない。すなわちヒューマンイズムの科学、あるいはヒューマンイズムそのものであると信ずるからである。」（疲労と精神衛生，1968）という桐原葆見先生の研究理念に傾倒され、労働科学研究所の創立者の一人である桐原先生に師事するきっかけになったものと推察されます。



2018年4月 最終講義にて

私は、大学卒業と同時に越河さんのもつて助手を務めることになりましたが、心理学、労働科学にはまったくの門外漢であった私に対し、同じ志をもつ仲間、同僚として接していただき、「私はアンタの先生ではない」と今日まで「先生」とは呼ばせてもらえませんでした。日頃私がいろいろな場面で失敗し、落ち込んでいるときなどは「こら、しっかりせんか！」と強く、少し乱暴な言葉で叱責されますが、私が体調を崩したときは、一転「おい、大丈夫か？」と真顔で大変心配そうに、いたわりの言葉を投げかけていただいたものです。

生活時間に関する研究

昨今「働き方改革」が広く叫ばれていますが、越河さんは1960年代半ばに、働く者にとって、勤務時間の長短および仕事の内容と同様に、勤務外の生活行動のあり方も重要である、との考えをすでに出されています。これは「生活行動の時間的類型に関する研究」（1968年）として学位論文にまとめられています。その後も生活時間調査を続けられ、通勤時間を含む「勤務拘束時間」とそれ以外の「勤務間隔時間」とのバランスが重要であること、すなわち、職場を退社して翌朝出勤するまでの勤務外の生活行動のあり方、特に睡眠時間とくつろぎ時間が大切であることを示しておられます。残業時間が長くなれば、睡眠はもちろん、テレビを観たり新聞を読んだりする“くつろぎ時間”にしわ寄せがくることになります。「人間くつろぎ場面がないと…」は越河さんの口ぐせで、労働と休養のバランスの重要性を早くから説いておられました。

蓄積的疲労徴候インデックス（CFSI）の開発

よく「コンピュータというものが出現して以降、世の中がなんだかおかしくなってきた」と冗談交じりに話されていました。これは、当時、コンピュータには「これを使えば、素早く、正確になにか新しい結果が出てくる」といったイメージが広がっていたことに対する反発、疑問でもあったと思います。最近の「AI」

なども一部はこれに当たるかもしれません。越河さんは、流行っているものには、まず「本当に良い物なのか？」という疑問をぶつけ、本質をついたものか否かを常に睨んでおられました。

そのコンピュータを使わねば進められなかったのが、蓄積的疲労徴候インデックス（CFSI）の開発に関する研究です。アンケート形式の調査では、ある質問に対して何%の人が「○」をつけたのかや、「○」がつけられた割合が高い質問はなにか、など主に応答率で集計・評価されてきました。かつて桐原先生から「応答率だけでなく、何か模様（パターン）のようなもので結果を評価できないものかね？」と助言をもらい、これがヒントになり、結果のパターン化を思い立ったと聞いています。

CFSIの開発には、私も当初から参画させてもらいました。質問項目の作成には、「いま現在」のことだけでなく、「どうもこのところ感ずる」、「ときどき感ずる」といったさまざまな症状に関連しそうな質問を、これまで開発使用されてきたいろいろな質問票の中から選び出し、また、新たに追加しました。この作業は、当時指導していた卒業研究の学生さんも交え進めたのですが、こんな時、越河さんは上機嫌で、みんなで楽しそうに議論し、進めたことを思い出します。

この後、実際に現場でアンケート調査が実施され、対象者は、製造業、金融業、医療福祉関係、情報関係など男女合わせて6万例を超えるものとなりました。これを集計し、因子分析を行い、結果のパターン化を試みました。越河さんは、私が届けた分析の中間結果を元に、因子の解釈と取り組まれましたが、この時、何かの会議に出席中にもかかわらず、会議はそっちのけで、メモを見ながら夢中で検討したと聞いております。そして時折、「うーん、これは面白い！」とつぶやいておられ、解釈に苦しむというより、むしろ楽しんでいるように見えました。多くのサンプルを対象に統計的な処理によって作成された尺度ですが、越河さんは、“これが何を捉えているのか？”，“これで何がわかるのか？”，など質問紙調査法の限界についていつも自問自答を繰り返しておられました。

このように開発されたCFSIは、その後、多くの現場調査に利用されてきました。近年は、看護労働に携わる看護師の労働負担調査、特に三交代制から二交代制への切り替えなどによる変化の研究調査や、職場ごとの労働環境を評価するための資料として多く利用されています。

「桐原葆見の労働科学」研究会

研究会は2000年11月より、桐原先生の高弟であった太田垣瑞一郎先生から“桐原先生のことを話してもらう”，ことで始められたと聞いております。太田垣先生のお住いの近くにある老舗の蕎麦屋の小上がりで、お互いに都合の良い時に、不定期に開かれ、私が参加させてもらったのは、2005年7月からでした。会では桐原先生の思い出や、労働科学研究の体験談など、お互いにまったく自由に、そして楽しそうに話されました。お店の名物でもある「蕎麦焼酎」の“そば湯割り”と簡単なつまみで始めるわけですが、ある日などは、冒頭から30分くらい、それらには一切口を付けず、熱心に議論を交わしておられました。桐原先生と直接お会いしたことのない私ですが、おかげで桐原先生の業績だけでなく、お人柄などもうかがい知ることができました。

越河さんは、桐原先生のほとんどすべての著述物を精力的に調べ、毎回、そこから“桐原語録”を抜き出し、整理し、コメントを付け加えてこられ、その情熱的な仕事ぶりに敬服いたしました。「労働の生産性」第1部～桐原葆見の労働科学～(2006年4月)および第2部～桐原葆見の教育・技術論～(2008年8月)は、この会ですべて企画・編集されたものです。第1部は企画からわずか半年で出版できましたが、これは、編集にパソコンによる卓上出版システム(DTP)を使い、原稿から直接トンボ(トリムマーク)の入ったゲラ刷りを出力し、毎回これを基に出版物をイメージした編集が、効率よく進められたことによるものでした。これにはお二人から「これはいいねえ！」としきりに感心され、感謝されました。

会は2011年11月まで続き、「第3部」編集の話も出ましたが、太田垣先生が体調を崩され、2014年に逝去されたため、いったん休会となりました。越河さんは、その後も労働科学研究の現状と将来について案じておられ、同僚でもある大橋信夫さん(日本応用心理学会名誉会員)の参加協力を得て、数人の若手の研究

者にも声をかけ、2018年6月に会を再開しました。取り上げられたテーマは「モラル調査」、「規制作業と自由作業」、「精神健康管理」、「創造的余暇論」、「産業疲労の実態」などで、主に桐原先生の著作物を資料として、毎回自由に、そして楽しく議論されました。

技術革新に伴う職務特性の変化や、作業方式と心身健康管理の問題など、時代が変わり仕事の内容が変化しても、労働の主体はあくまで人間であり、そこで発生する様々な問題にどう対処すれば良いか、越河さんは常に考え、悩み、心配しておられました。太田垣先生が、95歳までお元気で研究会に出席されていたことから、越河さん自身も同じ年まで頑張らねばと、常々おっしゃっていましたが、残念ながらもありませんでした。「桐原葆見の労働科学研究会」は、新型コロナウイルスの蔓延により、40回目となった2020年1月を最後に中断したままとなっています。

■略 歴

1932年 10月 12日 宮城県名取市生まれ
1959年 東北大学大学院教育学研究科修士課程修了 教育学修士
1959年 東北大学教育学部助手
1961年 (財)労働科学研究所入所
1966年 芝浦工業大学助教授
1968年 教育学博士(東北大学)「生活行動の時間的類型に関する研究」
1981年 (財)労働科学研究所 労働生理・心理学研究部長
1990年 (財)労働科学研究所副所長
2000年 松蔭大学経営文化学部教授
(公財)大原記念労働科学研究所協力研究員
産業・組織心理学会名誉会員
日本応用心理学会名誉会員
2022年 4月 30日 逝去(享年89歳)